



古いタヒチ語テキストにおける百以上を表す数表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2013-12-03 キーワード (Ja): ポリネシア諸語, タヒチ語, 数詞 キーワード (En): 作成者: 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2703

古いタヒチ語テキストにおける百以上を表す数表現

その他（別言語等） のタイトル	Numeral Expressions for 100 or Higher in Old Tahitian Texts
著者	塩谷 亨
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	10
ページ	1-6
発行年	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/2703

古いタヒチ語テキストにおける百以上を表す数表現*

塩谷 亨

Numeral Expressions for 100 or Higher in Old Tahitian Texts

Toru SHIONOYA

要旨：タヒチ語では百以上の数を表す表現において、「百」、「千」、「万」など桁の基準となる数の単位を表す数詞に二つの種類がある。タヒチ語固有の伝統的数詞と英語から入った外来語数詞の二つである。伝統的数詞は現在では使われなくなってしまったが、タヒチ古来の伝承の中には多数残っている。古いタヒチの伝承を多く収集した Henry(1928)に含まれている用例を見ると、これらの伝統的な数詞は単独で用いて、「百」、「千」、「万」、「百万」のような漠然とした数を表すのに用いられていた。また、その表わす数値についても曖昧な点が見られた。このようなことから、これらの数詞が示す数値の厳密性には疑問の余地があることは否定できない。しかしながら、これらの伝統的数詞の間に数値の大きさの序列の階層的な関係があること裏付ける例もあり、一桁の小さな数詞から莫大な数を表す数詞へと連続して拡大していく数詞システムの存在が認められた。

キーワード：ポリネシア諸語 タヒチ語 数詞

1. 序論

タヒチ語においては、「百」以上の数を表す数詞システムとしてはタヒチ語固有の伝統的数詞を用いるシステムと英語からの外来語数詞を用いるシステムの二つがあることが指摘されている。それぞれ、どこまで大きな数を表す数表現が存在するかについては文献によって若干異なるが、それらの中でも最も多くの種類の数詞を挙げている Henry (1928:324-5)によれば、伝統的数詞を用いるシステムでは、rau「百」、mano「千」、mano-tini「万」、rehu「十万」、「iu「百万」、tini‘iu「千万」、rau‘iu「億」、mano‘iu「十億」、a mano tini te‘iu¹⁾「百億」のような大きな数値を表す数詞が含まれ、一方、外来語数詞のシステムでは、英語からの外来語である hanere「百」(<英語 hundred)、tauatini「千」(<英語 thousand)、mirioni「百万」(<英語 million)、pirioni「十億」(<英語 billion)、tirioni「千億」(<英語 trillion)及びこれらを組み合わせた形を用いて、様々な大きな数を表す。また、現在最も詳細な辞書である Académie tahitienne (1999)ではこれ以外に、タヒチ語固有の伝統的数詞として nāna‘ihere「千」と mene

「二千」、更に外来語数詞として *miriā* 「十億」(<英語 *milliard*)という形が挙げられている。

現代においては、伝統的数詞は用いられず、専ら外来語数詞が用いられている。伝統的数詞の用例については古い伝承テキストを見る以外にない状況である。伝統的数詞の用例を多く含む代表的な文献として Henry(1928)がある。この文献は十九世紀の前半に集められた資料を基に編纂されたタヒチ古来の文化に関する記述である。この中にはタヒチに古くから伝わる様々な伝承や詠唱が収められている。従って、実際には十九世紀前半よりもはるか昔から伝わる古いタヒチ語データも多く含まれている。本稿では、この文献の中に含まれる伝統的数詞の用例を見る。

2. 古代タヒチの伝承に登場する伝統的数詞の例文

Henry (1928)においては、前節で述べたように数詞一覧には外来語数詞も含まれてはいるものの、実際に収録されている伝承や詠唱のタヒチ語テキストの中では専ら伝統的数詞が用いられている。欧米との接触前から伝わるタヒチ古来の伝承や詠唱の中に外来語数詞が登場しないのは当然のことである。また、実際の数詞の用例を見ると、必ずしも一覧に示されていた用法とは一致していないものも多く見られた。

尚、伝統的数詞は現在は用いられていない廃れた語彙であるため、それらが実際にどんな意味を持つのかを知るためには、Henry (1928)に示された英語訳が唯一の手がかりである。従って、以下の分析もそれに沿って分析したものである。

「百」から「百万」まで合計七種類とその反復形二種類の伝統的数詞の例が得られた。「百」を表す *rau* と *nāna‘ihere*、「千」を表す *mano* と *tini* 及びその反復形 *tinitini*、「万」を表す *mano* と *mano-tini* と *tini rau*、そして「百万」を表す *‘iu* とその反復形 *‘iu‘iu* であった。

<百>

(1) e nana‘ihere Papa‘oa,

～だ 百 Papa‘oa

「Papa‘oa という所は百（の価値があるもの）だ。」 Henry (1928:76)

(2) a rau te aro o te a‘a.

INC²⁾ 百 ART 表 ～の ART 根

「百の根があった³⁾。」 Henry (1928:342)

<千>

(3) e Ihu-ata e, e te mano o te atua !

～よ Ihuata ～よ ～よ ART 千 ～の ART 神

「Ihuata よ、千の神々よ。」 Henry (1928:484)

(4) ‘ia ‘ura tini

DES 赤羽 千

「千の赤羽があるように。」 Henry (1928:191)

- (5) e manava mai ra 'oe, e te ari'i nui tua tinitini;"
IPF 歓迎する DIR DEM あなた ～よ ART 王 偉大な ORD 千
「あなたは我々を歓迎する、千（番目）の偉大な王よ⁴⁾。」 Henry (1928:240)

<万>

- (6) ua mano te huru o Ta'aroa
PRF 万 ART 種類 ～の Ta'aroa
「Ta'aroa 神の種類は万とあった。」 Henry (1928:336)

- (7) a mano tini te aro o te a'a.
INC 万 ART 表 ～の ART 根
「万の根があった。」 Henry (1928:342)

- (8) 'o mātou, to'a tini rau o te moana.
PP 私たち 岩万 万 ～の ART 海
「私達は、海の万の岩。」 Henry (1928:344)

<百万>

- (9) a 'iu te pō i te pō roa 'ia ta'o.
INC 百万 ART 夜 ～に ART 夜 長い ～したら 言う
「名前を言うとしたら長い夜の中には百万の夜があるだろう。」 Henry (1928:404)
- (10) i parahi Ta'aroa i roto i to'na pa'a mai te pō a 'iu'iu mai.
PRF 座す Ta'aroa ～に 中 ～に 彼の 殻 DIR ART 夜 INC 百万 DIR
「Ta'aroa 神は彼の殻の中に百万の夜の間座した。」 Henry (1928:336)

この文献の用例中で実際に用いられていた数詞の一覧を表 1 としてまとめる。

rau	nana'ihere	tini / tinitini	mano	mano tini	tini rau	'iu / 'iu'iu
百		千	千	万		百万

表 1: Henry(1928)中の伝承・詠唱に用いられた 3 桁以上の数を表わす数詞

3. 伝統的数詞の表す数値の厳密性について

前節の表 1 が示すように、三桁以上の数値を表すのに使われる伝統的数詞として合計七種類の数詞の用例が見つかった。しかしながら、表す数値と数詞が必ずしも一対一で対応していないことがわかる。例えば、mano については「千」という数値を表す場合と「万」という数値を表す場合とがある。一方で、「万」という数値を表す数詞としては mano、mano tini、tini rau の三種類がある。

また、「千」を表すのに使われていた tini という形は、Académie tahitienne (1986:138)では「千」ではなく「十」を表わす伝統的数詞として挙げられている形である。実際、同じ Henry(1928)中の別の部分には tini が「千」ではなく「十」という意味で使われている例も在る⁵⁾。

(11) 'a tini te aro o te a'a.

INC 十 ART 表 ~の ART 根

「十の根があった。」 Henry (1928: 342)

しかしながら、塩谷亨 (2011)にもまとめたようにタヒチ語以外のポリネシア諸語のいくつかでは tini が「十万」のような大きな数を表わす数詞とされている。その事実を考えると、tini が「十」ではなくむしろより大きな数「千」を表すことは不思議ではない。

更には、これらの数詞が、具体的な数値ではなく単に「多数の」という意味で使われている場合もある。例えば、rau 「百」が「多い」という意味で登場することがある。

(12) ua rau te ara i te fenua e.

PRF 多い ART 道 ~に ART 大地 ~よ.

「おお大地よ、そこにある道は数多い。」 Henry (1928:83)

上述のようにこれらの数詞の表わす数値がどこまで厳密なものであるかについては疑問の余地があることは事実である。しかしながら、数値のあいまいさはあるにしても、少なくとも、これらの数詞の間に数値の大きさの階層が存在することを示す例が存在する。

(13) a tini te aro o te a'a.

INC 十 ART 表 ~の ART 根

a rau te aro o te a'a.

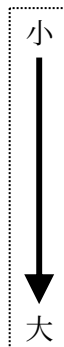
INC 百 ART 表 ~の ART 根

a mano te aro o te a'a.

INC 千 ART 表 ~の ART 根

a mano tini te aro o te a'a.

INC 万 ART 表 ~の ART 根



「十の根があった。百の根があった。千の根があった。万の根があった。」

Henry (1928:342)

例(13)は、天地創造についての伝承で、地上にどんどん根が広がっていく様子を述べた部分である。十個だった根が、百個、千個、万個とどんどん増えていく様子を表わしている。この例は、数値自体は大雑把なものではあるが、少なくとも、(tini < rau < mano < mano tini) のように表す数値が階層的に大きくなっていくことを示唆している。尚、ここでは tini は「千」ではなく「十」の意味で用いられている。

4. 考察

西洋文明及び英語と接触する以前のタヒチにおいて百を超える大きな数を厳密に数えることがどの程度有用であったかは疑問である。今回得られた例は、「百」、「千」、「万」、「百万」を表す数詞は、全てそれらの数詞単独で用いられ、「百」、「千」、「万」、「百万」という漠然とした数を表す用例であった。これらの数字を他の一桁数詞や二桁数詞などと組み合わせて、例えば、「二百五十一」、「三万三千」などのように具体的な細かい数値を表す例は見られなかった。しかしながら、これらの数の間に数値の大きさの階層があることを示唆する例もあることから考えて、たとえ漠然とした数であるとしても、一桁の数から二桁の数詞へ、そして三桁以上へと、連続してより大きな数へと拡張していく数詞システムの存在を認めることができる。

タヒチには十八世紀後半頃からヨーロッパ人が訪れるようになり、西洋文明及び英語との接触が始まる。その影響は言語にも及び、第1節で述べたような外来語起源の数詞を含む数多くの外来語が導入されることになる。そのようなタヒチ語において、数詞システムの歴史的推移の全体像を明らかにするためには、昔のタヒチ語の状況と今のタヒチ語の状況、そしてその中間の過渡的な時代のタヒチ語の状況を比較することが重要である。今回分析したデータは古代タヒチから伝承されている伝統的な数詞が用いられている昔のタヒチ語であった。現在、二十世紀以降の現代に書かれた各種文献のデータの分析を進めると共に、昔のタヒチ語と今のタヒチ語の中間に位置する過渡的な時代のものとして、十九世紀後半に出版されたタヒチ語訳聖書の分析も進めているところである。これらの現在進行中の分析が完了した後に、その分析結果を今回行なった昔のタヒチ語の分析結果と比較することにより、タヒチ語数詞の歴史的推移を明らかにしていきたい。

謝辞

* 貴重なコメントをくださった査読者の方々に謝意を表したい。また、本稿は文部科学省科学研究費補助金基盤研究C一般「ポリネシア諸語の数詞体系と数詞間の文法的特性の推移についての対照研究」課題番号：22520417（研究代表者：塩谷亨）の研究成果の一部によるものである。

注

¹⁾ a mano tini te 'iu という形は数詞句というよりも一つの文の形になっている。直訳すると「百万が万個あった。」となり、そのまま計算すると、「百万」×「万」＝「十億」という計算になるが、ここでは「百億」を表わすとされている。大きな数値を、数詞または数詞句ではなく、一つの文の形で表すという方策は十九世紀後半に出版されたタヒチ語訳聖書にもみられる。

²⁾ 本稿で用いる略号は以下のとおりである。ART:冠詞、DEM:指示詞、DES:願望、DIR:方向詞、INC:起動相、IPF:未完了、ORD:序数、PP:前置詞、PRF 完了

³⁾ Henry の訳には aro は反映されていないので、どのような意味で用いられているのか明確ではない。aro には「顔、表、見かけ」等の意味があるので、「何百の根の表面があった」という意味と考えられる。

⁴⁾ 序数のマーカー tua が付いているので、これは基数ではなく序数の用法と考えられる。

⁵⁾ 前節の表 1 に挙げた数詞のうち *mano tini*、*tini rau* という二つの形は *tini* を *mano*、*rau* とそれぞれ組み合わせた形となっている。これらについては、*tini* が「十」という意味で用いられていると考えると *mano*「千」×*tini*「十」=*mano tini*「万」、*tini*「十」×*rau*「百」＝「千」と分析できる。

参考文献

Académie tahitienne (1986) *Grammaire de la langue tahitienne*. Papeete : Fare Vāna'a.

Académie tahitienne (1999) *Dictionnaire tahitien-français*. Papeete : Fare Vāna'a.

Henry, Teuira (1928) *Ancient Tahiti*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 48. Honolulu: Bishop Museum Press.
Reprinted by Kraus Reprint in 1985.

The Bible Society in the South Pacific (1997) *Tahitian Bible*. Suva: The Bible Society in the South Pacific.

塩谷亨 (2011) 100 以上の数を表わすポリネシア諸語の数詞. *北海道言語文化研究* 第 9 号: 141-164.

執筆者紹介

氏名：塩谷 亨

所属：室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp